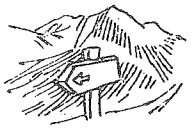
山田村青年教室開設50周年記念

復刻

山田村郷土史

山田村教育委員会



古跡

孝子　長彌の碑

山田村内には、孝子として富山藩主より褒賞された人が三戸ある。湯村、長井氏宅前にある長井安平の孝子塚〈孝子長彌の碑〉もその中の一つで、これは大正十三年一月湯村青年会が長井安平のことを聞き、建設したものである。

安平は十五才で父を亡くし、二十才の時不幸にもそこひ（白内症）という病気にかかって盲目となった。それで仕方なく安平は名を長弥と改めてあんまを仕事として温泉の浴客の治療（あんま）をしていたが、父母のことは片時も忘れずまじめに働き、お客に対しても常に親切にしていた。そして少しの無駄銭も使わず母には小遣を与えてお客よりきいた美談を聞かせて楽しませていた。

又、安平は産婆の術も巧みであったので産婦はほとんど彼に産婆をたのんでいた。このことにより村民の何れも安平の恩を感じて報恩講、正月の口祝い等には安平を招くことは勿論、農産物の初物は安平に贈ることを当然のこととしていた。後日、妻を迎えてからはいっそう一家睦まじく、孝子忘れず仕事に精をだしたので村の模範となった。このことがいつの間にか富山藩主の耳にもとどき、褒賞として鳥目（穴のあいた銭でその穴のあいているのが鳥の目に似ているから）五貫匁が与えられた。

安平は明治三十一年十一月、七十九才にしてこの世を去った。

鳥目五貫匁　　湯村長彌

右者盲人渡世心懸宜老年の母へ不一形孝養を尽し候旨御聴神妙之儀思召候依右之通り被下旨御用番西尾勘兵衛殿被仰渡候此段可申渡候以上

己五月十日（己は安政なり）

御郡奉行

浅野長助方

鳥目五貫匁

右のもの常々心得宜敷家内睦敷別然老母在命中不一形孝養を尽し神妙の事に候以之右之通り被下候旨庶務御主事西尾一角殿被仰渡候条此段可申渡候以上

己五月十九日

湯村長彌

御郡奉行

十村　大場儀之助方

代舌

基元儀常に親江孝行を尽し商売入念に相勤候其様相聞へ候に付富山座元に於ても神妙に被思召依然当所座元より為褒美として金子五十疋差上候猶更以全御働可被成候儀肝要者也

己九月晦日

八尾座元　品の一

和歌の一　調谷江（長弥の義）

湯村青年会は従来村内に婚礼があれば、その分に応じて酒肴の饗応をおくる習慣があったが、未成年者禁酒法案制定の趣旨をもって断然これを禁じていた。代わりにその方々の志により記念品代をおくられていたのでこれを別途貯金していた。湯村青年会はこの長井安平の話をきき、他の二戸はそれぞれ記念碑がたっているのに自村長井家のみに記念碑がないのを残念に思った。それで前記別途貯金で当時、婦負郡長尾宗義殿の筆により〈孝子　長弥の碑〉として、丸山幸治氏の敷地の寄附により建設したものである。

田中家孝子の碑

大蛇退治で有名な田中八郎兵衛は、大変親孝行であり、その事が藩主の耳にまで達して賞状が授与されたのは文政十一年（一八二八年）の事である。八郎兵衛の子である八郎平も又親に孝行をつくし、父子二代にわたって表彰された。

八郎平は小さい時から学問が好きで、家業の合間に大閤記、信長記、南朝記、三国史、善行寺縁起物語等を読んで理解し、これを父や祖父に語って慰めて、いつも親の言う事に逆わず専心親孝行をつくした。お正月や農閑期には他家へ招かれては講演して、時間のたつのを忘れて村民の知識の向上と教育に情熱をそそいだ。そして、自分が先生となって寺小屋を始め、さらに有志と小谷小学校（本校の先身は湯村小学校）を設立した。父は村役を努めていたので、時には富山へ出張する事があっても、その時は必らず外輪野あるいは室牧迄見送った。帰宅がどんなに遅くなっても家内一同主人が帰ってくるのを待ち、帰ってきてから家族みんなで御膳にすわるのが常であった。

八郎平は村風改善にも努め、男子の結髪は無益であるとして家族、親戚等に断髪を推め、自分も実行して世の先駆をなした。又娯楽機関の案出にも苦心し、鎌倉に伝わる太鼓踊りはその一つである。

村の産業として副業の奨励をして養蚕を進め、自分も百数十〆の収穫をなして、これを売り出す時に数十人の人夫が列をなし、八郎平のまゆ出しとして沿道の人々が見物するに至った。八郎平の善行を知った藩主は表彰した。賞状は次の通り。

鳥目五貫匁

右のもの常に心得よろしく家内睦敷別然父母へ孝養を尽し神妙の事に候依て右の通り被下旨庶務御主事西尾逸角殿被仰候条此段申渡候以上

鎌倉村　八郎平

御郡奉行

十村　大場儀兵衛方

明治二十二年六月、時の県知事藤島健正が田中家を訪問せられた時、父子二代にわたって孝子で表彰された事を聞き、そして賞状を見た。「父子続いて表彰されるとは奇篤な事だ、賞状が破損しかかっているから石碑を建てよ」と帰県後、当時の婦負郡長原弘三郎を経て勧められた。直ちに山田川より石を引き上げ、近村総出で翌明治二十三年七月竣工した。文字は中田町善光寺の住職の筆である。

孝子　伝四郎　伝三郎之塚

谷部落に入ると、大きな合掌作りの家が立ちふさがる。毛利伝三郎氏の家である。その家の前に石碑が立っている。表面には

「孝子　伝四郎　伝三郎　之塚」と書いてあり、裏面には「享和二壬戌年十月二十七日、郡奉行命建之」と書いてある。これは富山藩主前田利幹が伝三郎、伝四郎の親子二代にわたって親孝行がすぐれていたのを聞いて、御鷹狩の祭りに八尾の聞名寺に於て伝三郎、伝四郎を呼び、銭五貫文と賞状を与えた。賞状は次の通り

山口谷之内　　谷村　伝三郎
鳥目五貫匁　　伝四郎

右伝三郎儀生得実気成者にして孝道能心懸一家内睦敷相暮候段且又悴伝四郎儀取分父母へ考行不一通趣一々達御聴二神妙之儀依て格別之思召を以って御放鷹先於御目通父子へ右の通り被下候事

戌十月二十七日

享和二年（一八〇二年）十月二十七日の事で郡奉行に命じて建碑させた。

代々の言い伝えによると、伝四郎の父伝三郎は大変尺八が好きだったので、伝四郎は父を慰めんと思い、夜になれば必ず尺八を吹いて父を楽しませた。諸国を行脚して歩く僧侶が谷で宿った際、晩になって美しい尺八の音を聞いて、伝四郎の孝道を知り、僧侶が富山に出た時に藩主に申し上げたが故に表彰されるにいたったのである。

伝四郎の何代か後の伝次郎も農業技術がすぐれ、農業行政にもすぐれた見識を持ち表彰された。賞状は次の通り

谷村伝次郎

右のもの常に心懸宜敷耕業勉励之趣相聞篤実之事に候依之格別を以て長百姓次列可申付候旨民政局より被申達候条此段可申添候

郡治懸

己十二月二十四日　　浅野長助方
　　大場儀兵衛方

其方儀向寄村々のもの共農業に精不精勿論常に善悪の所行穏密全探索直等掘者共へ可申聞候事也

己二月

加藤権大属
須加樫大属
谷村伝次郎

日経上人の墓

湯谷川が山田川に合流する地点の上手に小高い丘がある。その丘に現在も多数の小石を積み重ねた墓のような土地がある。面積は約七平方メートル。

慶長年間、日蓮宗妙満寺貫主日経上人が、山田の地に日蓮宗を弘通の為にこの地まで来て堂を建て布教した。然し山田の地は真宗が盛んで遂に日蓮宗は振わなかった。そしてこの地でお亡くなりになった。元和六年霜月二十二日行年六十一才。

日経上人は「鼻欠けの日経上人」と呼ばれ、刀によって鼻を切り落されたお方で、大変苦労された。日蓮宗の中興上人として崇敬されている。

現在婦中町三瀬に「鼻欠けの日経上人の墓」があるが、それは、大正八年に建立されたもので、彼の地には日蓮宗徒があるので、塚や寺を建てたものと考えられる。

小島城について

飛弾国の三本木峠に出城があって三本木城といっていた。その城主は小島甚助といった。その三本木城が上杉謙信に落城した為、姉は家来や財宝を携えて山梨県の甲府へ逃げのびた。現在もその地に土着して、昭和七年まで、檜の板に書いた系図が残っていたが火災にあって今は消失した。

小島甚助と弟は、上杉勢に追われながら山田村小島の地まで逃げてきて、小島城を築き、何か月か小島を中心に山田の地を平定していた。

小島城は山田川と湯谷川が周囲を流れ自然の堀を形成し、きりたつ断崖は攻めるに難く、守るに易い天然の要塞であった。しかし、越中の一向一揆の攻略と父祖の仇討ちをねらう上杉謙信は再度越中に攻め入ってきた。

小島甚助は寺島牛之助と共に神保長職の旗本となって高山城、小島城の守りを堅めた。白井谷の鐘撞堂という山に釣鐘をおいて敵の来襲を報らせた。然し多勢に無勢、高山城が陥落、続いて小島城も上杉勢に落とされた。そして「乱の穴」という洞窟に身を隠して、生命の危険から身を守った。（乱の穴は浄土山に現在も残っている。）

上杉勢が若狭城への道案内を小島に残っている地元の武士に強制した。その時一人の婆さん上杉勢に「かんじき」のはき方を逆にしてはかせ、道案内の武士は正常にはいて雪道を歩かせた。上杉勢は歩きにくく、若狭城が見える谷部落までやっとたどりついて、這々の体で引き返していった。そのことばに「小島の武士は、雪道を猿（ましら）の如く走る。若狭の武士はもっと早いかも知れないから用心しなければならない。」と報告した。

この為に若狭城は守る準備ができた。一人の老婆の気転が時間を稼いだ貴重な逸話である。

その後、小島兄弟は巧みに逃げ隠れしながら小島に帰ってきて、兄の方は現在の小塚佐治の先祖となり、弟の方は小塚忠平の先祖となって現在地に住居を構えるようになった。

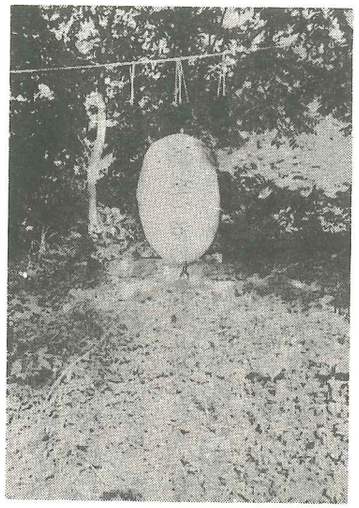
小島城は当初「大林の城」と呼んでいたが、後世になってから「小島城」と呼ぶようになった。なお小島の地名はここから取ったものとされている。

鏡の宮

今から約七五〇年程前（鎌倉三代の頃）、山田村鎌倉、現在の田中正治氏の遠い祖先に二人の兄弟がありました。兄は当然ながら家を継ぎ、此の地に住みましたが、弟は志を立てて京都に出て、某公卿様に仕えました。何分にも田舎者でしたので庭そうじ、薪割り、風呂たき等、庭雑役として働いていましたが、元よりこの弟は真面目で大変利発だったので、「山田男、山田男よ」と愛されました。そんな或る日の事、湯殿の湯を沸かしていましたが、湯加減も丁度になり、その旨を、公卿の娘、白滝姫（三女）に申し上げました。姫は湯殿へ来、湯加減をお調べになった所、少々熱かったので、山田男に「水を持て」と命令なさいました。山田男は、さっそく畏まって手桶の水を湯壺へあけようとしたところ、どうしたはずみにか、手桶の水が白滝姫の着ている着物にかかってしまいました。この時、田舎者とはいえ誠実な山田男にほのぼのとしたものを感じていた白滝姫は、後ろに振り向きざまに歌をお詠みになりました。「霞さえかかりかねたる白滝に心かけるな山田男よ」。このような高貴な公卿の娘とはいえ、日頃から白滝姫に淡い慕情を抱いている山田男はすかさず「照り照りて苗の下葉の枯るる時山田に落ちよ白滝の水」と歌をお返ししました。このあり様を一部始終蔭で聞いていた白滝の父親は、二人の成行を察し、山田男に、「姫は汝にとをすべし、　とく携えて故郷へ帰れ」とおいいつけになり、一方姫も、遠い北国での暮しを御承知になりました。この時代、公卿と一般の人との結び合いは国外追放という厳しい掟がありました。せっかく志を立てて京に上った山田男でしたが、掟に逆らう訳にも行かず、しかたなく故郷に帰ることにしました。

しかし二人の足取りは軽く、途中敦賀より放生津の水路、放生津より山田の陸路、長の道中も恙無く家に帰りました。出発の際父親は、嫁入り道具はもちろんの事、形見として黄金造りの合せ鏡を贈られました。山田男は姫との成行きを家の者に詳細に説明しました。家の者は大変驚いて、そのような高貴な方と同居するのは恐れ多いと言って、川向いの山（向い原鏡が窪）に新居を築いてこの二人を住まわせました。山田男はここで、白滝姫と共に生涯仲睦まじく暮したということです。

其の後二二～三代の田中家で、東の空より太陽が登り、向い原を照らす頃になると川向いの山田男、白滝の屋敷跡より、どんどことどんどことと神楽囃子が聞こえて



鏡の宮

来ました。始めの内はなんとも思っていませんでしたが、あくる日も、あくる日も東の空が白々する頃になると聞えて来ました。不思議に思っていましたが、ふと白滝姫の事を思い出し、これは確かに姫の、親の形見の黄金造りの鏡が土に埋もれているのだと、村中で屋敷跡を掘り起こしましたが、とうとうその時は鏡を発見する事ができませんでした。

そうこうして、今を去る事凡そ一五〇年前、蓮花寺村の九郎右衛門という人が、夢の中でお告げがあったという事で、当時の田中家の当主、八郎兵衛を訪ね、古い祖先の八資が建て、春秋二回祭礼を行なったという祠の境内から、かの形見の鏡の一面を掘り出して行き、現在外輪野用水の守護神となっています。又、もう一面は、明治十八年九月、八郎平の希望で、鎌倉の人々により、祠の大門を拡げる作業が行なわれていた時、中川善衛門と杉林円四郎の二人が一緒に茅株を起こそうとして打ち込んだ鍬先に、カチンと金属に当たる音がしました。不思議に思った二人は、そこの土を取り除いて掘り上げた所、それは一面の鏡でした。そこで善右衛門は八郎平を呼び、八郎平は急いで駈けて来てその鏡を手に取り、うやうやしく頂いて、これこそ、昔から伝え聞いている祖先の鏡であるということで、すぐに祠に立て飾り、居合わせた一同は礼拝し、一応八郎平家へお返し申し上げ、その年の九月十六日にかの祠に奉って御遷宮式を行ない、そこを鏡の宮としました。其の後、鏡の宮は遠方にある為、参拝が困難だったので、鏡を氏神八幡宮に移し奉り、鏡の宮跡に石碑が建ててあります。

尚、鏡は直径二寸五分、発見された時の鍬の当った跡が黄金色に輝き、裏には菊の花に双雀の模様があります。この物語より、大変優雅で、ロマンチックなものが漂って来ます。　この頃より山田の里には女尊男卑の風習が続いています

名所

薬師堂

薬師堂の社殿は松井角平（井波の堂塔大工）の棟梁にして判成屋の彫刻（トラの彫りもの）を入れ千本棧は桜の紋の金具がついています。享保八年（一七二三年）一一四代中御門天皇の時代（江戸時代）物部惣右ェ門という者が山田温泉に入浴に来た時、薬師堂に参り、白紙に大筆で二句の詩を書いて行きました。その翌年他の客（入浴客）の言うことには、彼（惣右ェ門）は惣藤郷と云う学者であるということなので、温泉の主人が其の文字を金文字にして二枚の柱掛とした。薬師堂は山田八景の一つである。

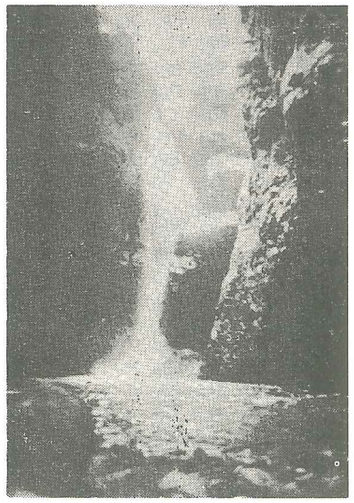
元禄九年（一六九六年）十月富山二代城主前田正甫院殿が山田温泉へおいでになった時、朽木の額に「医王」の二字を染筆され、現在の薬師堂の見付として掲げてある。又正甫院自ら山田八景を選択し漢詩を作った。

享保十九年（一七三三年）甲トラの九月富山法師権大僧都大阿闍梨が行遍の時「わき出る湯こそ薬師の瑠璃の玉、入る人こそ病いいけり」と詠まれました。　薬師堂の右側に不動尊の祠があり、又左側に村社（湯村）牛嶽社がある。藤の花のころはながめがよい。

魚止の滝

山田川上流の居舟地内にあり、高さが約十六メートルある。川全体で一大瀑布をなし、両岸には絶壁が迫っている。かっては滝の上に大木の橋がかけられ、そこから滝壺を望めば目もくらむくらいでその威容は雄大で美しい。又、その堂々たる瀑音は数キロ離れた所迄も聞こえる。この滝より上流へ魚は遡ることができないところから魚止の滝と名付けられた。

現在では人通りもなく、附近は神秘的である。

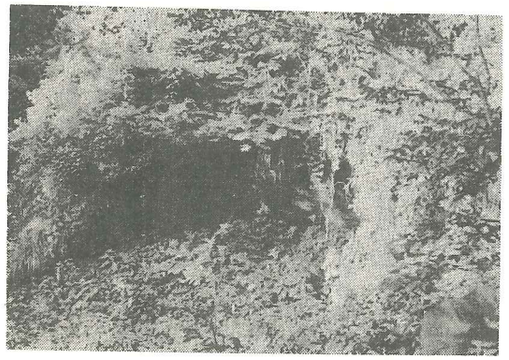


魚止の滝

こうもりが窟

鎌倉と湯の境を流れる谷川（俗称ドン谷）が山田川に流れおちる百メートル程手前にある。自然の岩石によりできた洞窟（間口二間奥行き六間）で、こうもりのすみかになっていたところからこの名がついた。現在は風化がはげしく、土砂がくずれ入り、形がほとんどない。

婦負郡史によれば、永禄六年（一五六三年）上杉謙信が富崎城を攻め落し、若狭城の城主が逃げかくれた所で、山田八景の一つとして一六九六年、富山藩主前田正甫によって選定された。

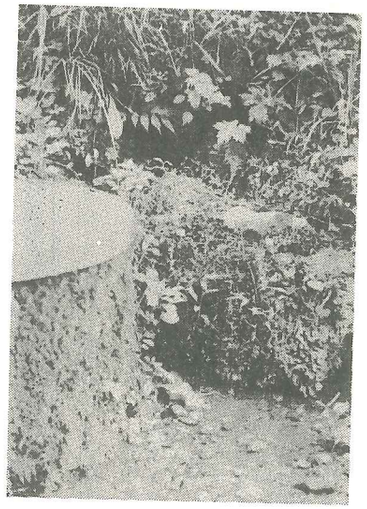


こうもりが窟

方便水

当村小谷地内の元蓮教寺屋敷跡にある。

現在湯村にある蓮教寺がこの地に在った頃、ちょうど本堂の阿弥陀如来がある真下から清らかな水が湧き出ていたことからこの方便水という名が付けられている。（阿弥陀如来を別名方便仏ともいう）この方便水は当時寺を訪れる参詣人ののどをうるおし、または諸種の眼病に効用があるので喜ばれた。今は屋敷跡の面影は殆んど薄れているが、この方便水は今日もなお湧出し附近の人々から親しまれている。山田八景の一つである。



小谷方便水

花久塚（花房）

小谷部落を流れる谷川の東側一帯を花坊佐といい（字名）花坊佐がなまって（転じて）花房になったと考えられる。

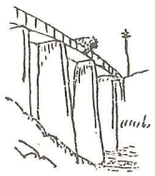
封建時代、ここはだいほうと呼ばれた柿が多く植栽され、この柿を里人は「花房（花坊佐）だいほう」といった。当時このあたりは塚状になっていたと伝えられる。

前田正甫公が山田温泉へ入浴の折、付近を散歩し外輪野用水の土橋（現湯柴田氏宅前）にさしかかった時、花坊佐の柿の実が枝もたわわになって花のように見事な景色の様を見て、里人にあの赤いものは何かとたずね、里人が柿の実の熟したものだと答え、この見事な景色より公は花久塚と命名し山田八景に挿入した。

虹が滝

虹が滝は湯村の下手にあり、その水源は湯村の高堤、下堤にあります。其の高さは五・六丈（十五～十八メートル）あり、陽が西に傾く頃、夕陽に映えて七色を放ち実に素晴らしい景色です。

元禄九年（一六九六年）前田正甫公によって山田八景の一つに選定されました。



烏帽子外しと牛つなぎ場

烏帽子外し

八尾山田間の県道中、湯村と高瀬村の境界に地蔵尊がある。その地蔵尊より東側百メートルばかりの所にこの烏帽子外しというところがある。

昔、この嶺つづきは飛弾往来でした。この烏帽子外しにたちて北方を望めば越中平野、富山湾を一望におさめ、又南方を望めば牛岳、金剛堂山がはるかにそびゆるのがみえた。

東砺波郡利賀村百瀬川の金剛堂山は弘法大師のひらいた霊場なりと伝えられている。大昔、諸国の行者がさかんに参詣に行った。その途中この場所を通るとき、はるかに金剛堂山を望み、必ず烏帽子を外して礼拝することを習慣としていたので、この場所をいつの頃にか烏帽子外しと呼ばれるようになった。

牛つなぎ場

湯村にある。烏帽子外しの窪地で、大昔よりの飛弾往来だった。ここに牛をつないで休んだ場所からこの名（牛つなぎ場）がついた。この辺より今も尚石斧等が出ることがある。

牛　嶽

牛岳のゆらい

牛岳の頂上を久和亨寄山見津賀峰といい、東砺波郡利賀村、東砺波郡東山見村、婦負郡山田村の三村の入り合った峯である所から名付けられた。また、ここは富山藩と加賀藩との境界地であるところから利賀村、東山見村、山田村の間で争いが起っており、御神体の奪い合いが激しかった。そこで鍋谷部落の民人達が今の古屋敷まで御神体を下し、しばらくしてなお部落の神社まで下し安置した。その後数年たってからまた領土争いが起った。その土地は鍋谷部落の草地であったが、部落の一人が自分の土地であると主張し、それを東山見村の人に売り払っていったので、昭和七年に東山見の人達は西野氏を中心としてその見津賀峰に今の社を建てたもの。しかし以前から争われていた領土問題が一層盛り上り、湯山部落の西野氏と鍋谷部落の前田市太郎氏が各部落代表とし、庄川町雄神神社神主、藤井秀一氏に中裁を持っていただき、鍋谷部落の地である事を確認した。それ以来牛嶽の御神体は鍋谷部落の神社に奉ている。

しかし、三賀峰の社は湯山部落民が建てたものであるところから、二十年に一度両部落民が峰に集まり、御神体を部落より持ち上がりお祭りを行なう事になっている。

鍋谷部落には牛嶽神社の本殿がある。そして本殿の扇が二つある。向って左側が鍋谷部落の牛嶽社で右側が牛嶽の御神体が安置されている。牛嶽の頂上は社のみで中には鏡があるだけです。牛嶽の御神体の重さは米半俵（昔の一俵は五斗）といって約十貫（約四十キロ）で祭の時になるとそれを箱に入れ、頂上へ人々がいれかわりたちかわりしてたてまつり、祭が終るとそれをまた本殿に安置させなければならなかった。急な斜面を四十キロもかついで登り下りする事は大変な事であった。御神体は大国主の命が牛に乗っている姿であり、一体が石でできている。だれの作か、年代はいつかという事はいまだわかっていない。ただ、高地の久右衛門（今は東と名のっている）が勧進元となってこれを作った。なぜ高地の民人が作ったかと申しますと、牛嶽は利賀村、東山見村、山田村の三ヵ村から成っている。しかし栂檀山高知部落は同じ牛嶽のふもとで生活していながらも、牛岳とは直接何の関係も持っていない。それではいけない、我々も何かお世話しようという事で御神体が作られた。

あるお祭の時、その御神体を頂上へ運ぶ途中、箱の底が抜け、御神体は下までころがり落ち運悪く石に当って牛の角が一本折れてしまった。さあ大変、お祭どころの騒ぎではない。早急に修理しなければならない。その鋳掛けを庄川町金屋の石工に依頼修理したといエピソードもある。

牛嶽の名の起り

大国主の命が牛に乗って登った山だから主の山、主嶽、それが次第に牛嶽となったもの。主という字はあるじの事を言い、うるおうと言う言葉より出たものです。ただいばり散らしているのがあるじであってはだめなので、下々の者、家族の者をうるおしてやらねば

一家の主、一族の主とは言えないのである。また嶽という字は山の大きい事を言い、嶽と字の付く山には神 霊 の奉っていない山はない。必ず修練道場あるいは御神 霊 があるか、あるいは付近の人々が神としてあがめた山などであり、この字の付く山では昔何がしかの形で信仰があった事を意味している。（例えば木曾の御岳等）

牛嶽の場合、住み良い場所というと今も昔も変わりはないが、人々は水のある場所を安住の地とし、そこで生活をしていた。山田にもそういった集まり、部落があちこちにいくつも作られた。そうして雪が消える時あの山の残雪は牛の形に似ている。また大国主の命があの山に登られたのだから、といっていくつかの部落の民人達が寄り集まって何かをまつろうという事からお宮が作られ、年に一度お拝りに来て、そしてそこで盛大なお祭りが行なわれるようになった。年月が立つにつれ、各部落にもお宮が建ちならぶようになった。その当時でも惣社である鍋谷牛嶽社のお祭りはりっぱなものであったが、人々の間にはだんだんと部落根情が持ち上がり、今では惣社より部落のお祭りが盛んになりつつあり、そして反対に惣社のお祭りは段々薄らいで現在にいたっている。

牛嶽の信仰（婦中町史より）

牛嶽神社の御祭神は現在では「大己貴命」や「素盞鳴命」であるがもとは自然神である。牛嶽そのものを祀ったものと思われる。牛嶽神社の分布は旧の町村では古里・音川・山田・仁歩・室牧・富川・東山見・栂檀山・栂檀野・池田の各村にまたがっている。

牛嶽が史上に初めて見えるのは『康富記』で宝徳二年（一四五〇年）庚午七月十六日に越中国奇異として後日人々の語り伝えによると、今日越中国に於て不思議な事があり、大風大雨がある時、雨中牛岳という所より光物が出る。其の体が雲中に鬼形をしている。良（うしとら・北東）の方向に発した。其の間十里程である。山河草木などことごとく損失した。

当時京都の公卿にまで牛嶽の妖異が知られていた。また古くから神異ある山として『越中地志』に越中旧事記伝とし、高山にて三月雪の消えかかる時牛の形に似たる故名付く。此山上に紅白紫黄の小菊多く生じ、晩秋の頃は甚よろしと言うと記されており、雪の形が牛の形をしていて、それを見て農耕の規準としたのは古代人の常で、それを神として祀るのも自然信仰の古俗である。かって頂上に登ったときも「石祠」「石塔」「石仏」の類が散乱していた。現在でも日を定めて山田村と東山見村とが、毎年九月三十日より十月一日同時に登頂してお祭りを行なうようである。

牛嶽神社の御神体は牛に乗った男神像である。そう古いものは見当らない。『神社明細帳』では御祭神が「大己貴命」と「素盞鳴命」となっている。大己貴命は山の神様であり、素盞鳴命は牛頭天王とも呼ばれるので、牛を連想して牛嶽社の祭神にあてられたのであろう。「越中で立山」と歌われる立山雄山神社でも現在これ程の末社の数はない。古俗を伝える点でも貴重な存在である。

なお大己貴命は大国の生命であり、大黒様であり、多気王でもある。

山田温泉

この温泉は文武天皇の昔、峯入行者達の牛岳の奥なる金剛堂山に於て諸尊瑜珈の密場を開き、山田温泉を内院とし、沐浴の潔浄をとる所といわれている。いつの時代にか一匹の玄猿が病みて苦悩する小猿を背負い、岩間に下りて一声さけびければ声に応じて数多くの玄猿が出て来て、病猿の身体に湧水をくみかけ、とかくする間に、病苦悦せるもののごとく、すなわち勇みて、諸共に山間に駆け昇りたり。折から一人の農夫対岸の畑にありて始終の様子を見、不思議と思い村長に告げ共に其所に至り、見るに温度を帯びイオウの気あり。扨てこれは温泉なるべしと村人に吹聴して湯槽を作る。これを聞きて四方より来たり浴するもの多く、湯の効果神の如くなり。これなん玄猿の縁起にして今より五四〇余年前、永享（一四二九～一四四一）年間にありとす。一説には春、猟夫がかの玄猿のことを薬師如来の夢想に告げられ、掘りて発見し元来、湯谷は或る方法を以って変更し、現今の位置に出ずるに至れりなると依って岸に薬師堂を立てなどするに、評判広まりて効験著しきによりて浴室とを出来せりと。その後婦負郡百八十ヵ村、新川郡七十三ヵ村の町人、百姓達の療養の宿として繁盛した。合田、経力、下の茗の温泉等と共に湯治という名で持病をいやすため、自炊しながら世の中から全くかけはなれた日々を送っていた。

富山二代藩主前田正甫公が山田の湯にかごをつらねたのは今から二七三年前の元禄九年（一六九六年）十月で、正甫公四十八才の時であった。晩秋の頃、秋のとり入れも終って柿の実が真赤に枝もたわわに熟すころ、公は村の肝入りや温泉の主人の案内で付近の山道をたどり、モミジ、カエデの紅葉する晩秋の景をめでられた。渓ふかき山田の清流、昼なお暗い杉の木立ち、黄に紅にしき織りなす峰々、葉の落ちつくした木に花のように夕焼けるカキの実、炭焼く煙、山峡の農家の夕げの煙など、正甫公にとってはなつかしいものの限りであったであろう。

公は山田八景を選定し、その名景をよんだ漢詩を添えて温泉の主人に与えた。温泉亭、山田川、薬師堂、花久塚、方便水、虹霓滝、鏡ガ窪、蝙蝠窟の漢詩は次のとおりである。

（一）温泉亭

携杖臨湯井　旧痾蚤已寧　熱泉医熱苦　流水逐流螢
雲隔古郷友　月輝邸舎檐　杜鵑不妨夢　独酌最無醒

杖を携へて湯井に臨む
旧痾蚤くも已に寧し
熱泉熱苦を医やす
流水流螢を逐ふ
雲は隔つ古郷の友
月は輝らす邸舎の檐
杜鵑夢を妨げず
独り酌みて最て醒むることなし

杖をたよりに山深き出湯に尋ねてきた。この温泉に一たび浴すれば、昔から苦しみ続けた自分の病気もすっかり楽になってしまったような気がする。きっとこの温泉が私の激しい苦しみをなおしてくれたのであろう。温泉にひたり、ふと戸外に目をやれば、清らかな山田川の流れのあちこちに螢がしきりと明滅しています。遠く雲のかなたにある友人達は今頃はどうしているだろう。今は心許して語る友とてもないが、私の心を知っているように静かに月光だけが私を訪れ、この私のいる部屋の窓を照らしてくれる。おりもおり、どこからともなくほととぎすの遠音が私を夢にいざなうように聞こえてくる。この風雅の中にあって一人淘然として盃を傾け悦楽の境にひたっています。何と素晴らしいこの地でしょうか。

（二）山田川

山水接天温泉涯　東流豈可羨俘家
脱巾被髪人間少　雲月自然斟紫霞

山水天に接し温泉涯る
東流豈に俘家を羨むべけんや
巾を脱ぎて被髪するも人間くこと少なり
雲月自然紫霞を斟む

山合いの流れが天に接するように見えるあたりが、山田川の源川であろうか、東方へ流れ去る川はひたすら俗世を離れた人の心のように澄みきって無心に流れ続けていることだ。かぶりものをとれば髪が乱れている。然し人々の往来もたまさかにしかなく、少しも気にならない位、静かな人里離れた土地である。

雲間からもれくる月光によって、あたりの景色は恰も霞みわたったように、ぼんやりと浮びあがっている。なんと素晴らしい光景ではありませんか。

（三）薬師堂

新開慈眼薬師仏　不断温泉如極楽
乃照十方常住燈　衆生浴去六根慾

新たに開く慈眼の薬師仏
温泉断へず極楽の如し
乃ち照らす十方常住の燈
衆生浴して六根の慾を去る

薬師堂を訪れ、今はじめて満面に慈悲の笑をたたえられた薬師仏を拝顔致しました。その薬師堂のあたりには涼々と温泉が湧きだし、此の世での極楽を見るような気持ちになります。この薬師堂には常夜燈の光がいつも明るく人々を導くようにあたりを照らしだし、人々は薬師仏の恩沢である、その温泉を浴びて身心のわずらいを清め病魔を逃れるのですよ。

(四) 花久塚

春草芳菲花久塚　騒人行楽唱巴歌
青山自雪恰銀色　月下挙盃如我何

春草芳菲花久塚
騒人行楽して巴歌を唱す
青山の白雪恰も銀の色
月下に盃を挙げて我何くにか如かん

花久塚のあたりには春草が芳しい香をたたえて萌えでている。風流を好む自分はこの辺を逍遙し自作のつたない歌をくちずさんでいます。ふと目を転ずれば初夏らしく樹木の茂った山々が見えますがさすがにこの地では夏とはいえあちこちに銀色に輝く雪が点在しています。丁度中天に明るく輝く月を堂でながら一人盃を傾け忘我の境にひたっている私ですよ。唯々素晴らしい花久塚の春景色ではありませんか。

(五) 方便水

一宇上方仏閣堆　常燈照室月崔嵬
衆人渇方便水　風逐孤雲促去来

一宇上方仏閣堆し
常燈室を照らし月崔嵬にあり
衆人渇を凌ぐ方便に水
風孤雲を逐ひ去来を促す

ふと見上げると寺の屋根が高くそびえて見える。その寺院は常に御燈明に照らしだされた如く明るくそびえて見えるし、一方険しい山の頂きに煌々と輝いています。その空高くそびえる寺院の境内にある方便の水で人々は渇きをいやし、人の世の苦労を忘れさるのです。その方便水にはちぎれ雲がうつり風の吹くたびゆれ動いています。なんとのどかな浄らかな方便の水ではありませんか。

(六) 虹霓滝

夕陽帯雨西山近　銀漢漸流虹霓滝
滝水醮雲千仞下　小魚管只化龍降

夕陽雨を帯びて西山に近し
銀漢漸流す虹ガ滝
滝水醮雲千仞の下
小魚管只龍と化して降る

雨上りの空にしっとりとうるおいを帯びた夕日が今しも西の山に沈もうとしている。夕日をおびて虹が滝が七色にかがやき、空の虹をたたえているように光っています。滝は空の薄雲の如く光り沓々と流れ落ちている。その滝を小魚たちは、龍になったように勢いよ

く流れ下ってくる。美しくも雄々しいこの虹霓滝ならではの景色ではありませんか。

(七) 鏡が窪

白雲出岫映前川　日落鏡窪如蓋盆
喬木長橋風景在　晩鐘疑是入禅

白雲岫を出で前川に映ず
日鏡窪に落ち蓋し盆の如し
喬木長橋の風景在り
晩鐘疑ふらしくは是れ禅に入るかと

白雲が鏡が窪から立ちのぼるように見え、山田川にその姿を浮べている。夕陽はまるく盆のように美しい姿をこの鏡が窪に浮べている。その日の影はあの伝説の姫たちの鏡を思いださせはしませんか。河畔の緑の木々は長い橋をかけたように鏡が窪におおいかぶさっています。どこから聞えてくるのか、夕を告げる鐘の音は静かに静かに私を俗世から引き離し、仙境に誘いゆくように響いていますよ。静かに美しきこの鏡が窪の夕景よ。

(八) 蝙蝠窟

挙節独歩青苔　幾引葛藤携路垓
尋得始知蝙蝠窟　有聞未見鳳凰臺
山川逆耳雨声夢　螢火凝眸流水隈
専去病根温泉徳　地東景色従蓬莱

節を挙げて独り青苔を歩む
幾たびか葛藤を引きて路垓に携る
尋ねて待て始めて知りぬ蝙蝠窟
聞く有りて未だ見ざる鳳凰臺
山川耳に逆いて雨声の夢し
螢火に眸を凝らす流れの隈
専ら病根を去りぬ温泉の徳
地東の景色蓬莱に従う

節をついて独り青苔を踏みつつ山道を進んでいった。何回となくころびそうになり藤葛にすがって険しい坂道を登りました。苦労のすえ、今ようやく蝙蝠窟を尋ねだすことができました。そのほこらは噂に聞いてまだ見たこともなかった鳳凰臺の地にありました。この地に一たび足を踏みいれれば、谷川のせせらぎが静かに降る雨音のように耳に聞こえて来ます。うっとりとこの景に見とれている時に流れのふちに螢がちらっと走って飛び去りました。もう一度その姿を見たくてじっと見つめているのですがもう見えなくなりました。

自分の病気を癒すことができたのもただただ素晴らしい景色をそなえた此の温泉あればの事でした。いいようもなき佳景の土地、その中でも此の山田村の東方の景色はちょうどあの仙境蓬莱山にたとえられる位、すばらしいものでした。

尚参考までに鉱泉定量分析成績書、医治効用書を掲載しました。

鉱泉定量分析成績書

一　名　称　山田温泉
一　位　置　婦負郡山田湯村
一　泉　質　塩類温泉
一　温　度　摂氏三十九度
一　反　能　弱アルカリ性
　　煮沸すれば少し白濁す
一　固形物　二・八三〇三瓦（一リットル）中
　　コロールナトリウム　二・〇七六八瓦
　　カリウム　僅少　　硫酸　少量
　　カルシウム　稍多量　　炭酸　少量
　　マグネシウム　痕跡　　硅酸　痕跡
　　鉄　痕跡

化学的定量分析右之通りに候也

明治二十七年十二月

薬剤師　林　綬太郎

医治効用書

右分析表に拠れば之に適応する病状概ね右の如し

但し内用或は外用浴用等に須らく医師指示を乞うべし

一、消化不良　一、慢性胃カタル　一、常習便秘　一、慢性腸カタルの或種類　一、血肝　一、腺病質　一、慢性子宮炎
一、子宮外膜炎　一、子宮周囲炎　一、膀胱カタル　一、尿石　一、喉カタル　一、急性慢性気管支カタル　一、慢性発疹　一、痒疹　一、鱗屑癬　一、多汗症　一、蕁麻疹
一、犢皮病　一、急性発疹の快復期　一、慢性湿疹　一、黒瘢病　以上

明治二七年一二月　富山病院長　赤沼信吉

今山田のカッラについて

山田の里に人類が住みついたのは縄文式時代の前後からである。湯谷川を挟んで両側つまり小谷、赤目谷側、そして今山田、清水側の山の峯を狩等をして生活をしていたと考えられる。今もなお、この土地からは縄文式の土器が度々発見される。

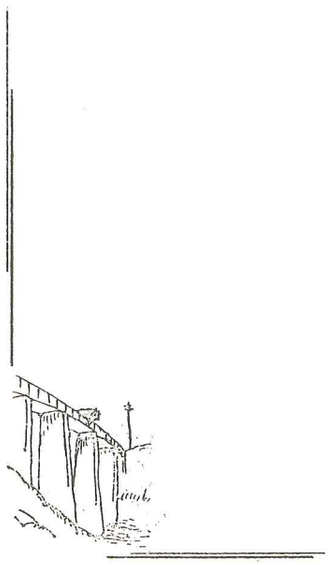
人皇四十二代、文武天皇の頃、我国では最も仏教の盛んな時代であった。又、大化の改新が行なわれ、初めて年号ができ、大宝律令が制定され、和銅開珎という貨幣が生れ、奈良の都が完成されようという、今から千二百七〇年前頃、金剛堂山（海抜一六三八メートル、富山・岐阜県境、婦負・東砺波郡境、山田川の源より二十数キロ上流の地）は、山上に大きな寺を建て、越の国（富山県）の山伏

の崇拝の霊山で、修練場であった。その道が長沢―外輪野―牛滑―今山田―牛岳―深道―高清水―利賀―金剛堂山へとのコースで、今山田はその休息所となり、山伏達が一休みし、又牛岳へと続く坂道の鋭気を養った。この金剛堂山通いの道が出来た頃から、今山田も栄え始めた。

そして鎌倉時代の末期で南北朝時代、後醍醐天皇の第八子の宗良親王が征東将軍として越の国に来て、越の金剛坊に長い間帯在した。（金剛坊とは後の西連寺（天台宗）である）　その内宗良親王の二人の子供が死に、高岡の二塚という所に葬ってある。今も尚二つの墓がある。二塚という地名もここから来たものである。

その後の宗良親王の詳細については不明であるが、大日本史には信州のウバ捨山によく似た川内山田の地のカッラの木の下におかくれになったと云われている。このカッラは今は周囲約十三メートル大人八人がやっとかかえる位で、根元からは炎天にも涸れることを知らない清水が、滾々と湧き出ています。地上二・二メートルの所で幹が七、八本に分かれ、それぞれの一本が、周囲二・二～三メートルもあり、春は赤、夏は緑、秋は紅色と美しく、その昔遠くを走っていく船が位置を知るのに大変役立った。別名、船印のカッラというのもこのことからであろう。その附近一帯はヤブ椿の自然叢で、当時落武者達が蓮如上人の教化によって、武士を捨ててこの地に安住して部落を開拓した人達の墓所で、春になると、一斉に開く椿の花ビラ一枚一枚にも遠い昔が偲ばれる。

また意外にもカッラの木の背後から五輪の塔が見つかった。塔には梵字が刻まれており、これは鎌倉時代のものであり、宗良親王の側近のものが親王を偲んで建てられたものである。この附近一帯は土地台帳によれば、安らかな野（安野）と呼ばれ、今も尚村人から親しまれている。昭和四十年十月一日に県の天然記念物の指定を受けた五百七十才の老カッラは、当時を偲んでいるのか、ただただ、寂しげに年輪の数を殖している。その後、今山田も農林業に力を入れ、昭和三十三年には、総工費一千十万円、延長四千五百二十メートル、幅三・六メートルの中村地内に達する林道が完成し、文化、経済の両面に役立っている。



文化財

聖観世音立像

このみ仏は堂々たる巨軀で、相貌は太い眉、切れ長の眼、おだやかな唇は敏どく結び、表情は温和であるが荘重味がある。簡素で衣文の皺襞の盛り上りは豊かではないが、肉体の盛りは比較的豊かで弾力性を帯び体軀は重厚である。宝髪は堆く、その上に仏をいただき、宝冠の模様は甚だ簡素であるが、権衡がよく保たれた弘仁仏としての風格を備えている。

常楽寺聖観世音

今から約八百年前、宿坊村の水上源次郎の祖先に水上半助と言う人があり、当時この近辺まれなる大地主で其の家の庭内に大きな榧の古木があった。この大きな榧の木を切りて高さ二メートルの観音像を刻んだ。これを同部落にある千坊寺に安置し、近所の住民、それに千坊寺に宿をとる真言宗の修業僧たちが日夜礼拝を怠らず信仰していた。当時同村に仁蔵と言う人が住んでいた。（現松田仁蔵先祖）この仁蔵に毎夜同観音が大坪森田の常楽寺に行きたいと夢の告げがあり、村人達と相談の結果、御花として山林二十四割（七十五枚）をつけて常楽寺に渡すことにした。村民総出で山田村と保内境まで見送り、境の山頂で引き渡し合いとなった。この時山頂より清水がわき出しこの水で手を清め引き渡した。この地を仏坂と称し宿坊村中心より約一・五キロメートル北に行った所で今もその清水は夏もかれる事なくわき出しているが、この清水は諸病に効顕あるとして薬水とされていた。

又この仏坂より約一キロ保内より（平林）山腹に布を引いて送ったと言われる布引き坂がある。現在も赤土に白く布を引いてある様にはっきり見られる。

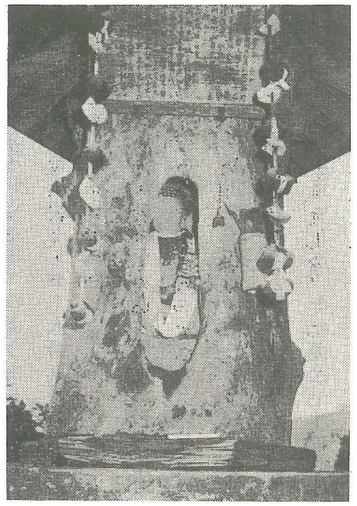
現在観音は常楽寺内の十一面観音とならんで安置してあり国宝となっている。又観音を刻んだ榧木の株は、村人達がこの由来を失なわない様にと古宮屋敷（現沢連）に引き上げ移植すると見事に生きかえり三代目の新芽が茂っていた。数年前この榧のある古宮屋敷も牧草地とされた為、今まで生きていた榧を地の中にうめてはならぬと、部落の青年会（沢連青年会）が現在の宮の庭内に再び移植した。現在高さ六十センチ位にそだっている。

北条時頼自作の像

康元元年（一二五六年）六月に北条時頼が諸国を行脚中、この村にきて向い原と言う地に立って見ると富山平野が相模湾に似ており、他の方を見ても古郷の鎌倉（神奈川）に似ているので鎌倉と名付けられた。尚川向うの山を「烏が森」、背面の山を「日高山」と名付けた。そして当村に来た記念として自作の石蔵を造り樫の若木を石像の横に植えられた。その石像と樫の木は現在でも残っている。

北条時頼は康元元年（一二五六年）に出家して名前を最明寺入道と称した。そして鎌倉に来た。この自作の像がある所は今開拓され水田となっているが、一部分に地蔵菩薩を安置して年々祭っている。

村民の善右衛門と言う者が近くの村へ出かけて御堂を建てる為に必要なお金を集め回り、御堂を建立し石像を安置した。この御堂が結構美麗なので、近くの石像に比べるような御堂がないくらい自作の北条時頼に立派なものを建てたといい、この善右衛門を人々は堂一と称した。そして今に至る迄、堂一と称せば知らない者がいないという。この善右衛門は明治三十九年三月に北海道へ移住している。当時の御堂は今は廃して地蔵尊として安置してある。樫の木は大正五年から六年の頃枯れてしまった。そしてその根からは若木が芽を出して現在成長している。



駒切り坂

最明寺殿の前に坂道がある。村民が参詣に来る前は若土村に通ずる道路として使用されていたが、何人も騎馬でこの坂を登って行くと馬が恐れたり、膝を折ったり、疾駆したりして負傷する者が多く、騎馬する者が一人もいなくなった。だから人々は同所を呼んで駒切り坂と称した。

焼残りの名号

鎌倉田中八郎兵衛方に本願寺第八世連如上人がお書きになった、焼残りの名号を安置してあるが、その由来をたずねると、東砺波郡井波町にじょうない又八と称する人の家に、連如上人御真筆の名号を仏だんに安置してあったが、宝暦三年（一七五三年）の秋、井波町が大火に見まわれ又八は、井波別院に火事場の手伝いに行っていた。しかし又八の家もあぶないという事なので家に帰ってきて見たが、家は 焼けてしまい仏様も出せず、たいそう悲しみました。その後一週間程たってから井波町の山牛の杉谷山という所の大きな松

の木に仏様（名号十字九字）のようなものが懸っていると言ううわさを耳にした。又八はもしや上人御真筆の名号にちがいないと、心ある人（信者）達と一諸に杉谷山に行って見ると、果して松の木にかかっているのはまぎれもない名号すなわち仏様であり、紙はやけこげて十字九字の字だけが残っていた。又八は大変喜んで持ち帰り同町（井波町）の川原屋甚右衛門という表具師に修理を頼みました。

当時同町に樽屋新右衛門と言う人が住んでおり、大火のあとたびたび不思議な夢を見ました。その夢は十才程の子僧が新右衛門の家にたずねてきて「私は又八方に身をよせている者だが、長い間あなたの家とつき合い（出入り）を親しくしていた、山田の郷の鎌倉の八郎兵衛に行きたいのだが、なんとか御世話して下さい」と言う夢でありました。又樽屋の娘あそが同年（宝暦三年）の春井波町の稲我と言う家に縁付いていたが、あそもたびたび新右衛門と同じ夢を見たので里家（親家）にこのことを話すと、親子同じ夢を見るのは仏様の夢のお告げであるということで、樽屋の家では又八方に出向いて夢の事を話し、又八、樽屋両家の話合いの上、山田郷鎌倉、田中八郎兵衛方へ飛脚をたてて八郎兵衛に紹介した。八郎兵衛は家の雇いの若者二人をつれて井波へ行き、三者一同話し合いをした結果、又八、稲我あそ、田中八郎兵衛の三人は表装の出来あがった仏様（名号）をもって鎌倉へ道を急ぎました。その時井波の信者の方々は今の栃檀野の当りまで見送りに来たという事です。鎌倉八郎兵衛方へ御仏（名号）が来たのは、時に宝暦三年（一七五三年）十二月二十一日。今もこの焼残りの御仏（名号）は田中家に伝わっている。添翰書もあります。

※蓮如上人（一四一五～一四九九年）室町中期の僧で真宗中興の祖。本願寺第七世存如上人の長子で童名依丸。長禄元年（一四五七年）本願寺第八世、寛正六年（一四六五年）比叡山衆徒の襲撃手にあい京都東山大谷を出て、近江に逃れ、文明三年（一四七一年）越前の吉崎に赴き、北陸地方を化益、吉崎御坊を建立。

位牌堂

富山二代城主前田正甫公他界後、温泉の主人が公の位牌を裏の山手村社の鳥居のそばに安置した。これが位牌堂である。

天保年間十代城主（藩主）前田利保が息子前田利友（後の十一代藩主）と共に山田温泉入浴の折、この位牌堂にまいり五言絶句の四面の額及び花久塚と山田川をうたった和歌（青銅製の花立て）を献納した。花立は今も湯本氏所蔵、五言絶句の額は次のとおり。

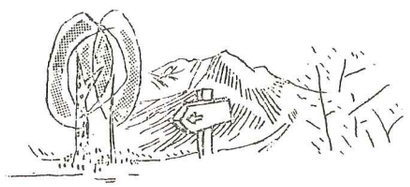
敷竿君子竹（益斉）
松有千年寿（利友）
寿献金茎露（益斉）
梅動雪前香（益斉）

益斉は利保公の号（今でいう筆名）

又現在に残る和歌は

吸みよし朽木も今に残りありて年にましらの山田川かな
山田川湯村のさくらさけにけりぬるむ流れに影をうつして

又堂外の額は「雲無心」を書し納閑雲書としてある。閑雲は高岡市瑞竜寺の名僧で、幕末頼山陽はじめ京都の志士文人と親交があった。



伝説・逸話・実話

湯元の猿のゆくえ

（上山米次郎氏より）

小島部落を西へ三キロ、その山の一つに大原という地あり。その地の一つに「猿が馬場」と称する所がある。一段下った小さな広場である。直径四メートル余り、現在は草木がおい茂って昔の面影は少しもない。当時その囲りには四本の松の木がちょうど広場をかこむがごとく四隅に、またその枝ぶりは土俵の屋根のごとく被っていた。そしてその地一帯は急斜面もなくなだらかな雑木地帯、人間でさえ手渡り出来る枝々。太陽の光がとても柔かく身を包み、中にいるのがおしいようなある日より。静かだった森が急にざわめきだした。キャキャ……キャキャ、どこからともなく集まって来た山猿の群。大きいのやら小さいのやら、親は子供をだいて、子供はしっかりと親の腹につながって雑木の枝から枝へ、一路猿が馬場を目指して……。　その猿の群が広場に集まって一つの遊びをやっていた。木の枝に座って見ているもの、ぶらさがって見ているもの、あるいは丘の上で見ているもの。その集まりのまん中で、互いににらめっこしていた二匹。突然くみついた。相撲をしているようである。くんだままあっちへころがり、こっちへころがりまるでけんかである。ボス猿を決めていたのかも知れない。あるいはただの遊びかも知れない。そうしているうちに一匹の猿がきずを負った。その猿、きずをなやめるようにして川へ下り、岩間から出ている水をすくい、それをきずもとへさするように打ちかけ浴びていた。何日も何日も川へ下ったのだろう。
これを村の民が見つけて温泉の元となったものである。　―　小島の名称地の一つ　―

大蛇退治

天保六年（西暦一八三六年）五月二五日の朝、鎌倉の田中八郎兵衛（現田中正治氏の五代前）が田の水を見回って自分の家に帰ってみると、座敷の外から二階のあまへかけて松の木が立て掛けてあった。これは誰のいたずらかと不思議に思い近寄ってよく見ると、松の木ではなく大きな蛇である。蛇はあまの窓から首を入れて二階に飼っているたくさんの蚕をなめているのである。（蚕は蛇の息を受けると腐る。）驚いた八郎兵衛は手の平で蛇の背をたたいてみたがいっこうに動じる様子もないので、今度は手に持っていたクワで背をたたくと、蛇が八郎兵衛の方に振り返って

白い霧のようなものを口から吐いたので、そのクワを大蛇の口に打ち込み、声を限りに助けを求めたところ、八郎兵衛と一緒に水回りをして一足先に家に帰って主人の帰りを待っていた下男八人が、主人のその叫び声に驚き外に出て見ると主人と大蛇が闘っているのである。下男達が驚いて手に手にカマ、クワ、棒などを持ち出し、力を合わせてたたかい、　とうとう大蛇を撲殺したのである。その後皆んなは朝飯をすまし、田んぼの仕事へ出る時、死んだ大蛇を下の山田川（今の中川原）へ持ち運び割木を積んで焼却した。焼却する前に下男が計ったこの大蛇の大きさは長さ一丈九尺八寸（六メートル）、胴まわり二升樽（直径二〇センチメートル）もあったという。明日の朝、下男達が草刈りに出かけてその焼跡を調べてみると、頭の部分は焼けて胴の部分が焼け残っており、そこからは昨日見えなかった蛇の手足が出ていた。如何に化物であったかが伺える。（この蛇は今の杉谷あたりから出て来たものと察っしられている。）

このことはすぐに近在の町村に知れ渡り、見物人が絶えなかった。又、この大蛇退治をなした八郎兵衛は近隣数カ村の役前を勤めており、富山へ出る事が多く、それから八日目に藩の御用で出富したところ、既に大蛇退治の事が藩主（九～十代目前田利幹公）の耳に達しており、藩主に呼ばれた八郎兵衛は其の事実の模様を細々と述べたところ、藩主は八郎兵衛に次に富山へ出た時は自分の家に来るようにとの事。八郎兵衛が次に殿の家に寄ったところこの前話した大蛇退治の模様を墨絵二本にあらわしておられ、そのうちの一本を八郎兵衛が賜わり家に持ち返ったのである。田中家ではその後代々この絵を作物の神として祭ってたいせつに保存している。残りの一本の墨絵は色がつけられ、今もなお東京の前田家に保存されている。尚この大蛇退治をなした八郎兵衛は親に孝養一方ならず、ゆえに藩主の耳に達し褒賞を授与されている。

水天宮不動尊の歴史

上中瀬部落

部落に入ると、村の上に巨大な杉の木がすぐに目につく。この杉は、今から約三百年程前（江戸時代、徳川家綱の頃）に植えられたものだが、その木は誰が植えたものかは今だにはっきりされていない。ここでその木の歴史を称しておこう。

昔、この部落には水が無く、山田川から水を汲んで飲水に充てていた。ある時弘法大師が乞食に身をやつして、諸国を歩んでいた時、ふとこの部落に立ち寄り、山田川から水を汲んでいる民の姿を見て、「これでは日常生活三度三度の水をくむと言う事は大変な事であろう、私が水をさずけよう。」といって自分のついていた杖にて水口を付けて下さったのがこの木の根元である。この水は京都の清水寺に次ぐ清ら

かな水であるといわれている。またこれを飲むとお産によく効く、すなわち安産できるとされ、今でも他村から水をくみにくる人がたえない。この部落においては難産で生れた子供は今だにないと言われている。

ある時、杉の木の近くに有ったユノミの木が枯れたので、村のある民が薪にした。するとその人が病気にかかったので、民々は神のたたりと恐れ、水天宮を奉った。これは明治十七年頃である。これ以来、この水天宮の屋敷地より何物と言えども持ち出すと、たゞまち病気にかかったり災難に会うとされ、村人は木の枝たりとも持って行くものはないとされている。

この水天宮と共に奉られているのは不動尊（火の神様）である。この不動尊を奉ってからは、この部落には火事らしき火事はないとされ今日まで、百数十年間続いているという。

宿坊について

仏教の盛んな時代から武士の時代となったが、三百年続いた徳川時代も一八六八年、自由民権の明治と年号は変った。

この年、明治初年四月二十二日宿坊村杉本善七宅から出火し、十数戸が全焼となる大火があった。この火事以来宿坊部落の人々は今日までこの日を火祭とし獅子舞を行ない火の神に感謝している。当時宿坊村（現在沢連、柳川を含む）は戸数七一戸で政府に納める税は、

米（水稲税）　三百四拾八石五升七合
畑（畑　高）　百三拾九石六斗八升
山役銀（山林税）（六拾七匁弐分弐里）銀で納める。
漆役銀　弐拾匁　　蠟役銀　四匁一分
銀納畑四匁一分　の税を納めていたことから、当時の農民は漆や蠟などを作っていたと思われる。そのほか夫銀、口米税を金で納めていた。これらの税金の四九%を米で納めていた。

蛇にまつわる神秘

小塚久米次郎氏が元上山米次郎氏の隣に住んでいた頃の話である。

蛇の中でも青大将というものは家の主、どこの家でも必ずといっていいくらいに住みついているものである。

時は今だ浅く、大正十一～十二年頃、歴史というより神の神秘な力を描き出した一つの話である。

ある日、久米次郎が農作業を終え、家に入ったところ、一匹の蛇、蛇といっても胴まわり一寸五分～二寸といったあまり大きくないものであった。久米次郎その蛇を打ち果たしたれば……。　その家には生後四～五ヵ月の赤んぼうがいた。赤んぼうはまだはう事も出来ず、つぶらなひとみを見せつつ、つぶらで日一日を送っていた。ある日、家中農作業に出かけて赤んぼうが一人であった。それが突如として火の気もないいろりの遇で黒く焼け死んでいた。当時警察が喧く、ちょっとした出来事をも口にだす事さえゆるされなかった時代、上山米次郎の母が何かこげくさい匂いがすると思い隣をのぞいてみるとこのありさま……。考えてみるに、こういった出来事はあちこちで耳にするが右記の事柄は小島におきた神秘の一つである。　（上山米次郎氏を尋ねて）

竹森義秋氏の武勇伝

何時の世になってもなくならないのは戦争である。昭和十二年日華事変が始まった。この戦争には我が富山県からも数多くの若者達が戦地で国の為に戦ったのである。その中の一人山田村沢連出身の竹森義秋氏もその一人であった。竹森氏は二十才で徴兵され満州行きとなった。満洲は日本陣地となったため、一時家に帰り休養をしていたが、再び日華事変が始まり上海へ向った。この時義秋氏を見送った母やいさんは、義秋は病気ぎみだったので他の兵隊さんに比べ、なんとなくさみしい出兵であったと目になみだして語ってくれた。この竹森義秋氏戦死の様子を昭和十二年十一月十三日の富山日報は次のように報じている。

単身十数名を殺し敵陣地に四日間生存、婦負郡山田村出身の故竹森勇士

飯塚少佐麾下の竹森義秋氏（婦負郡山田村出身）の勇壮な物語を述べよう。

竹森義秋君は十月四日須宅の戦闘に於て、グングン敵銃砲弾の雨の中をついて突撃ついに数百の敵群がる陣地の只中へ入ってしまったのだ。勿論友軍との連絡はある筈はなかった。最初敵陣へ飛び込んだ時ウロウロする支那兵が味方かと思っている処を十数名続けさまに竹森挺身兵につき殺された。スワ日本兵だッとあわてた支那兵は竹森勇士目がけ手榴弾の雨をなげつけたが手榴弾をなげつける支那兵の手許へとび込んではつきとばす神技にさすがの敵も勝算なしとなだれを打って逃げた。竹森氏は此の健闘で身に四発の手榴弾創を受け胸、手、足に十数ヵ所の銃剣刺創を受けたまま虫の息となって敵陣中に四日間も生存していた。七日須宅の完全な占拠後始めて此の勇士の姿を戦友が発見し、一早く野戦病院へ運んだのだが、手厚い看護を受けつつ遂に七日夜半、「天皇陛下万歳」とベット上で叫びつつ江南の花と散って

いったのである。

そして我が息子義秋の散った地を一目見ようと単身で父親の故喜平さんは上海まで出向いていったのである。喜平さんは家を出る時ワラジをはき、越前ゴザを背にして、縦六〇センチ横九〇センチの日の丸の旗を手に、上海行きの許可をいただく為まず東京の陸軍省を訪れたのである。陸軍省に着いたが憲兵がワラジをはきゴザを背にしている喜平さんを見て、乞食あつかいをしてなかなか中に通してくれなかったが、しつこくねばる喜平さんに負け、喜平さんは当時の陸軍大巨安部信行氏に家からもって行った日の丸の旗に「至誠無息、陸軍大臣安部信行」と書いてもらい、これを許可書として上海にむかった。この時、陸軍大臣へのみやげとして家から「山いも」をもっていったそうである。喜平さんの上海での行動を昭和三十八年一月五日の富山新聞が「秘録悲風万里」の見出しで次の様に述べている。

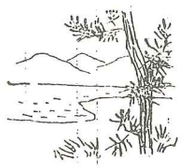
華中須宅敦宅の激闘　富山三五・六九連隊を中心―　日華事変　息子戦死の地へ竹森氏手向ける内地の水、米

いつの世でも子を思う親の心は変りはない。国情が緊迫し国民総決起の掛け声が　激しくなり日華事変のぼっ発だ。おれもおれもと血気盛んな若人達は胸をはって出征していった。生きて帰らじと……。しかし親達の願いはひとつだ。ただひたすらに生きていてくれ、元気な姿で帰って来てくれと……。婦負郡山田村宿坊農業竹森喜平さん（故人）の長男義秋伍長（第三十五連隊第一大隊一中隊一小隊第三分隊長）もお国の為に出征した一人であった。そして十月四日敵第一の堅陣須宅に向って突撃につぐ突撃が開始された。ついに敵前三十メートルの線にまで追出したが、連　なる鉄条網によってその突入がはばまれた。再三突撃突破がくり返されたが敵も頑　強に抵抗。側方よりの一大猛射によって神田明春中隊長以下戦死傷者が続出した。この時最前線にあった竹森伍長は部下を指揮して勇猛果敢に進撃するも敵弾を頭部に受けて気を失ってしまった。その間中隊その犠牲の大きさに急拠猪突猛進型を断念、四日夜再度の突撃を期して後退のやむなきにいたった。どうを掘って次期の攻撃準備をすすめるとともに戦死者の収容と負傷者の手当てに取りかかった。しかし敵もさるもの、日本兵が後退したとわかって逆襲に転じてくる。その騒然たる戦場においての死体収容は困難をきわめた。犬のようにはいながら、広い戦場をさがしまわるのだ。見つけるとキャハンでしばりつけ引きずってくるのだ。戦死者の収容と負傷者の手当て、そのうえ敵の逆襲で戦線は混とんたるありさまを呈していた。夜明けまで前戦をはいまわって捜索を続けたが竹森伍長の死体？がどうしても見つからないのだ。敵弾を受けて倒れたあとどうなったのだろう。しかし銃弾の下をくぐっているうちに、いつしか忘れられてしまっていた。ところが六日夕刻になって全身血と泥にまみれながら中隊のごうにひょっこりと帰ってきたのだ。息も絶えだえとなって、まる三日間自由のきかない身体を引きずりながら夜暗を利用して一寸きざみに広い戦場をにいずってきたのだ。「よかった、よかった」とみんなで喜びあったのもつかの間、野戦病院へ

向うタンカの中でついに戦死したのだ。その竹森伍長の父喜平さんが十二月二十日頃蘇州付近の警備にあたっていた中隊に異境万里の地に単身訪ねてこられた。「むすこ義秋の戦死の地をこの目でたしかめたかった……」と。案内を命ぜられた斉藤太平伍長（福光町荒木）、石川喜太郎上等兵（立山町大森）、南塚借作上等兵（高岡市二塚）、浦田嘉造一等兵（富山市布目）の四人は戦火の跡もなまなましい須宅付近を見てまわり、義秋君の受傷したと思われる地点に白木の墓標を立て「義秋よお前の戦死した所へとうとうやってきたよ。全滅的な損害をうけた激戦のようすもわかり、お前の死もいたしかたなかったと思う。静かにねむってくれよ」と持参した内地の米と水をささげ合掌落涙する。「これで胸の中もすっきりしました。私はしあわせものです。肉親がどのように戦死したかもわからない遺族が多くあるのに…」と感激の面持ちであった。……と。

小島の落盤

昭和十七年八月下旬一時すぎ、お盆も過ぎ農家にとってこれからといった時の出来事であった。ゴオーッ、ダダダ……。ひと休みしようと昼寝していた時、突如としてものすごい音。何事が起きたかと小島はもちろんその周辺の部落の人々があわてて家を飛び出した。するとカイノ木という地があるが　その一帯高はほてならし（小島の地）から松島宅の上より白井谷の橋の近くまでが熔岩のごとくくずれ、みる影もなかった。全く悲惨な出来事であった。

当時小島は四十五軒。その地にいたのが九軒。しかし、人々は前々より地割れ、どてのゆるみ等があまりにもはげしくなり、それが家にまでひびき、戸が開かなくなったり庭にひびが入ったり、これではとても住んでおれない、夜もろくに寝られない、危険だ、というので一軒、また一軒、そうして最後の一軒を残したまま安全地帯へ移ってしまった。その後いく日か過ぎたその時刻、自然はかんにん袋の緒が切れたかの如く、その一軒をのみこみ、なだれとなったもの。その家（小塚宅）ではけが人もなく馬一頭を失っただけにとどまった。

自然のおそろしさ、その力の偉大さというものを知っておくべきである。